

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑤1

五葉の頂(いただき)から流れる沢水は、釜石市内に入ると甲子川と名を交える。一方、同市小川町の奥山、雄岳を源とする小川川が合流する旧河道一帯は「長崎野」と呼ばれ、ここから大渡川(おおわたりがわ)となつて太平洋へと注ぐ。

この地域は川石が高く積まれた堤防があり、その内側に我が母校、中妻小学校があった。戦争も激しくなつた昭和二十年四月、私はこの学校に入

学。間もなく町が攻撃されるという報道により、生徒達はそれぞれの親戚を頼つて田舎へ疎開し、戦争の終結を待った。

戦争が終わつた二学期、再び登校して目にしたのは、校舎に打ち込まれた無数の銃弾の跡。変

わつてしまつた学校に、戦争のむなしさを感じながら耐乏生活が続く中、無傷で残つた清流・大渡川や川面に映る五葉山に癒されて育った。

五葉の山の 風さむし スをとつたが、簡単に見青年になつたある日、喧騒とした職場で働く同僚十人と五葉山に登ろう遠かつたことを覚えてい

る。 サケが大海原を回遊して故郷の川に戻る行為と、故郷で催す小学校のクラス会は似たところが

学校では、校外授業と称して堤防にのぼり五葉や愛染の山をよく写生させられた。頂が丸い五葉と鋭角な愛染の山は独特の山容をしており、描きやすかつたことを覚えて

五葉山はそう高くない山でありながら、麓から頂まで多様な植物が分布してトレッキングに最適、未来に残しておきたい山であると思う。

【大石小学校校歌】 雲井遙かに 五葉山名だたる 麓の櫻道名勝青島 磯伝い

行事があるたび五葉が詠まれた校歌を歌い、運動会では五葉松を図柄にした旗で応援。幼き脳裏に五葉山が刻まれていつ

戦後の復興も一段落した昭和三十九年、釜石市を震わす製鉄所の合理化により、大勢の若人が名

へのお慕は校歌とともに消えることはない。里に恵みを与え続けてきた山、郷愁を感じさせる山、それは五葉である。

校歌に詠まれた五葉山

愛知県大府市 松田 明

「中妻小学校校歌」
♪ここ東海の 夕日かけ山と山の となりせり 谷間のおくの 中妻や

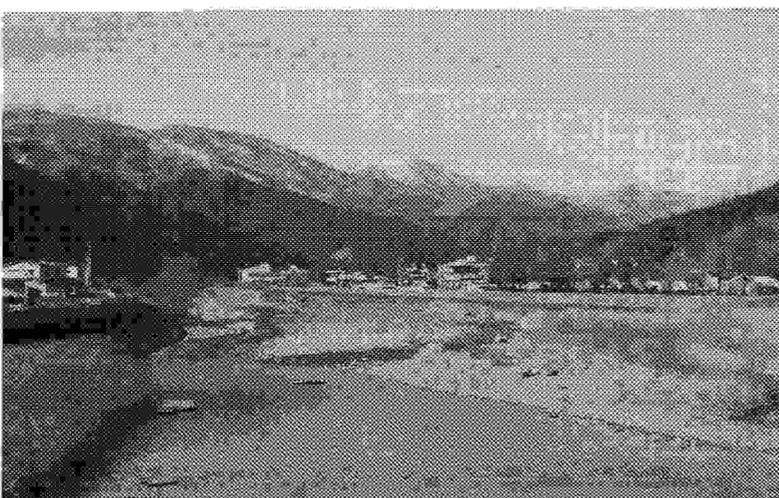
急坂を這いながら登つた。この坂を登りきると低木帯に出て視界が明るくなり、背丈が隠れてしまふほどのクマザサの道を

を歩き分けて進み、シャクナゲ林を通りぬけた先が頂上だつた。

丘の上にあった学校は更地となり校門だけが残っていた。校門の横に記念のモニュメントが建て



「ここが五葉の頂上か」としばしパノラマに見とれたあと、帰りは勾配の緩そうな鳩が峰を経由して松倉へ抜けるコー



よく写生した釜石の原風景。丸い頂の五葉山(左奥)と三角山の愛染山(中央)